

男女共同参画からみた男性問題

——エンパワメントのための生涯学習の実践事例——

中村 彰

＜ キーワード ＞

メンズリブ、男性更年期、男の会話術、官公庁との共同参画

＜ 要 旨 ＞

メンズリブの市民活動を始めて十数年、男たちの語りの場を提供してきた。

活動の主たる目的は、男女共同参画社会の実現をめざす男性側の取り組みである。男性が「男らしさ」に縛られることなく、また女性を抑圧することなく、いきいきと生活できる社会環境づくりを訴えてきた。といっても、これまでの十数年のあゆみは、社会へのメッセージの発信よりも、私たちと出会いのあった人たちに癒しの場、リフレッシュして自分探しができる場を提供することが主たる活動だった。

男たちだけの場にこだわったのは、女性にエエカッコをみせたい男たちが、ふだんは晒してはいけなさと自己規制している自分の内面、多くは「強く、たくましくあれ」という男らしさのしぼりとは対極の自分のもろさや弱さと向き合う機会にしたかったからである。

はじめに

本稿では、私の個人史とメンズセンターの活動を紹介することを通して、男女共同参画分野における男性のエンパワメントの実践事例を紹介する。

になるとは、当時は想像だにできなかった。ただ、男性として生きることの息苦しさを感じていた私にとって、その思いを共感できる男たちとの語りが新鮮だった記憶は鮮明だ。

1. メンズリブの誕生

1) それは女性学の集会から始まった

日本の男性解放運動の代名詞とも言える「メンズリブ」を初めて名乗った「メンズリブ研究会（後のメンズセンター）」が誕生したのは1991年4月だった。私を含む関西の5人の男たちが呼びかけ、大阪と京都を会場にした会合は現在も続いている¹⁾。

このグループ発足のきっかけとなったのは1989年9月に大阪府豊中市で開催された討論会「男はフェミニストになれるか」だった。開いたのは日本女性学研究会で、フェミニズムの周辺にいた男性がパネリストとして名を連ねている²⁾。私も、この討論会に司会兼パネリストとして参加したが、後に大きなうねりとなる「メンズリブ」市民運動の真っ只中に身を置くこと

2) 団塊世代のひとりとして

私は、太平洋戦争敗戦後の混乱期に、大阪の都市近郊農村に暮らす三世同居家族の長男として生まれた。いわゆる団塊の世代である。この世代は、あたらしい民主教育を受け、一方で、伝統的価値観を家族や世間から学び取った。新旧の価値観を内在化している。ちょうど、1960年代後半の大学紛争の当事者世代だが、当時の社会のありように激しく抵抗を試みながら、男女役割分担意識などは、ウーマンリブにより問題提起されたように旧来の観念そのものを引きずっていた。たぶん、それゆえに、同世代の女性たちが、ウーマンリブ、フェミニズムの大きな波をおこさずにはおれなかったであろうし、男たちの多くは、歯向かったはずの社会——その権化というべき日本株式会社に忠誠



を誓うというどんでん返しを演じたのである。

少年時代の私を振り返ると、腕力に自信がなく、声で他人を圧することもできず、泣き虫でもあった。外で元気に飛びまわる遊びを好まず、物静かに過ごすことを好んだ。スポーツも嫌いだった。

スポーツだけでなく勉強においても、父親の方が優れていた。努力の積み重ねで自分を切り開いてきた父親は、息子である私にとって、私にもできるという希望の星ではなく、常に比較して劣等感に私を追い込む存在だった。いつか立場を逆にしたいと念じつつ、それは、かなわぬ夢であり続けた。

先年、父親はガンに冒され、ついに帰らぬ人となった。最後の数日、病院で介護の日々を過ごしたが、その折、肌のふれあいを通して数十年ぶりに親密なコミュニケーションを果たせた気がする。

幼いころ、抱いてもらったり、手をつないでもらったときの感触が、いまでも身体に残ってはいるものの、それ以後、没交渉のまま長い年月が過ぎた。私にとっての父親は、直接交渉をさけたい苦手な存在であった。

上手に世渡りをして競争に勝ち抜く力を息子につけさせようとする親心は、ときとして、息子を奈落の底に突き落とす。

高校生のころ、自分の存在を亡きものにしたいと思っていた時期がある。自分と同じ苦勞をさせたくない、子どもをつくるまいと考えたこともある。

私の子どもころの遊びは、チャンバラごっこかソフトボールだった。バットやグローブを買ってもらったが、ありがた迷惑だったといえば、恩を仇でかえすことにあたるのだろうか。

キャッチボールは苦手。バッティングはいつも三振ばかり。そんな息子がはがゆくて、父親が忙しい合間をぬって相手をしてくれた。自信をつけさせようと、手加減して打ちやすい球を投げ、受けやすい球を返す。一方、私の友人には、きびしい球さばきで勝負する。そんな現実がかえって私を自信喪失に追い込んだ。

中学から私学の進学校に通ったが、勉強に追われる毎日に嫌気がさした。両親だけでなく叔父や叔母がエリート校を出たことが、強いプレッシャーとなった。

学力や運動神経も人それぞれ。力量にあった生き方ができたら、それでいいではないか。そんな当たり前のことをメンズリブに出会って、やっと自分のものにすることができたのである。

3) 女性学のグループに参加

大阪や京都での女性学の集会に出入りを始めた。女性学の集会で、女性たちの訴えに耳を傾け、男性たちの発言を聞くにつけ、女性から伝わってくる迫力にはインパクトがあるが、男性の語りからは心を打つ感動を持たず、ずいぶん差があるように感じていた。

もちろん、これは個人差ともいえる。発言者が、女性問題として語っている内容を、どれだけ、しっかり受けとめているかの差なのかもしれない。単に知識として受けとめているだけなのか、自分の感性そのもの、身体全体で受けとめているのかの違いだろう。

その場につどうからには、そこで話されている内容を、自分のものにしてこそ意味がある。自分の全存在を問い直す。そういう取り組みを経て、何をつかむかが大切なのだ。

男性は、そもそも女性問題の語り部たりえるのだろうか。性差別は、差別を受けている側には歴然としたことが、差別する側には、その存在さえわからない。そうした構造のなかで生きる男性にとっては、女性学は、自分自身を問い直す内省の場として、大いに活用すべきだが、女性に向かって女性学を吹聴することは慎しもう、と思うようになった。

男性が心すべきは、女性たちの代弁者として発言するのではなく、女性たちの思いに共感できるのなら、その共感の思いを、男性に向かって、自分の言葉で語ることだ。女性たちから、そのことを学んだ。

私は、男性である自分にとっての心の軋轢を率直に語るなかで、理解しあえる男性たちとスクラムを組むことに関心が向き、私の活動の中心はメンズリブに変化した。

男性の眼で、男性である自分を問い直すこと。そのとき、いまの社会のなかで男性がおかれている状況を見据える眼をしっかりと持ちたいものだ。

「自分探し」のためには、自分自身を語る場を持つことが大切だと考えている。世間の眼がどうかではなく、自分が望ましいと思うありようを見つめることである。自分が何をしたいのか、どう感じているのかを言葉にしてみる。そうすることで客観的に自分を見つめてみる。女性学や男性学の視点で照らし直して、自分を眺める機会を持つことが大切だ。

男性が女性学を学ぶ機会を持ってもよいと思うが、フェミニズムの活動の主たる担い手は女性に任せておけばよい。女性問題の解決をいちばん望んでいるのは



女性たちなのだ。

女性の思いに共感できるのなら、男性は、男社会のなかで生きる男性のひとりとして、いま何をなすべきなのかを問うこと、つまり、男性問題の解決が、男性の側が果たすべき緊急課題である。1989年当時、私は、そのように考え、「男性学元年」という短文を綴っている³⁾。

2. メンズセンター活動でみてきたこと

1) 男たちの会話術

男性は、仕事をするためのノウハウとして事実関係をきちっとおさえて話をしていく会話術は人並みにはある。ところが、多くの男性に欠けているのが、自分の気持ちとか感情を上手く表現できないことである。

先日、Bさんが、女性と二人で喋っていたときに彼女の側からクレームが来た。彼女が問いかけた質問に対して即答できないBさんがいたのだ。

Bさんは彼女から言われた。「いまのあなたの気持ち」を聞いたに過ぎないのに、それに答えられないあなたがいる。それっておかしいのではないか。「難しい議論をしていて答えに窮するのならわかるが、あなたのいまの気持ちだったらすぐに答えられて当然じゃないか」と言われた。

でも、答えられないBさんがいた。それは、気持ちを伝える言葉をすぐに紡いでいけなかったというか、いまの気持ちにぴったりの表現って何なのだろうかと、つい頭で考えてしまったりする。素直に感じたままを伝える言葉が出てこないのだ。

Bさんは、自らを振り返り、そういうものを学習してこなかったのじゃないかとも思った。

「男らしくあれよ」と育てられるということは、うれしいとか楽しいとかいうことも含めていろんな感情を素直に表現することに対して歯止めをかける側面がある。辛い悲しいと思っていても、それを素直に出してしまうと「男なのだから、それぐらい我慢しなさいよ」ということになってしまう。うれしいことにしても表情一杯にして訴えることは好ましくないというイメージがある。

そうすると、「感情表現をするまい」と抑止することになり、極端な言い方をしたら、感動しない自分に組み変えていくことになる。すると、いざ感情を表現しなければならない場面に遭遇したとき、たとえば気持ちを問われたときに、言葉がすぐ出てこないような

状態に自分が置かれていく。そういったことが繰り返されるなかで、夫婦のズレを大きくしている。

たとえば夕飯食べながら、いろんなお喋りをする。そういうときに彼女の側から今日こんなことがあったのよという話が出てきたときに、Bさんは後で思うのだ。「ああだ、こうだ」という事実についてだけ反応し即答している。それでBさんはちゃんと繋がって話をしているつもりなのだ。

ところがふと後で振り返ると、ああ、彼女はこんなことしてきたよということじゃなくて、こんなことがあって、うれしかったとか、辛かったとか、悲しかったとかいう気持ちを伝えなかったのだなと気づく。そのときに話された事実関係には確かに反応しているのだけど、その気持ちにまで入れてない。逆にいえば自分の気持ちを吐き出せてもいない。

そうすると細かな事実関係のやり取りのなかで解決できることはしていても、その気持ちの部分に曇りが出てくる。そして、うまく自分の気持ちを発せられないことがドメスティック・バイオレンスの背景にもなっている。

男らしさを背負って精一杯にカチカチに頑張っていくことが、内面を晒さないということにつながっている。気持ちをうまく吐く。「いま、しんどい」「辛い」ということを、もし言えていたら、相手がその状況を理解でき対応の仕方も変わってくる。でも、それがわからない、伝えられないということが続くとミゾを深くしていく。うまく表現できない分、どんどん追い詰められたような状態になってしまって爆発させてしまう。

夫婦間だけでなく親子でも、あるいは男性同士の関係でもそうだが、気持ちのやり取りの仕方をうまく育ててこなかったことがギクシャクさせてしまうことに繋がっている。

男たちが豊かな感情表現や気持ち表現を取り戻していく、自分のなかに育てていくことで人間関係がずいぶんよくなる。それで、いまの社会のなかで起こっている諸々のすべてが解決するわけではないが、気持ちや感情をうまくやり取りする能力を高めることで回避できることがある。

そしてもうひとつ。男たちというのは、自己評価するときにマイナス志向をしがちだ。仕事がちやんとできて当たり前。Bさんがいた職場もそうだった。何もミスが無く済んで当たり前の世界、だから誉められる



ことがない。でも失敗をすれば、そこをどんどんとつつかれる世界。そうすると「欠点だらけの僕」というかたちで自分を見てしまう。でも、本来、人間は長所も短所もあるし、短所と思う部分も見方を変えれば長所であったりするわけだ。マイナス志向ばかりしてしまわずにそれをプラスに転じるような発想の転換が必要だ。

2) 孫とふれあい気付いたこと

3歳の孫がいる。男の子だ。一緒に暮らしているわけではないが、近くに住んでいるので、ときどき訪ねてくれる。

彼はクルマが大好きだ。特に工事用車両が好きだ。工事現場の近くを通りかかると離れようとしない。「やっぱり男の子」と周りは見ている。

彼は、ままごと遊びも大好きだ。「後片付けしているの」と言って、お鍋の底まで洗う真似をする。嬉々として遊んでいる。台所で、大人が料理をしていると自分も手伝おうとする。子どもが、性別ではなく、その子なりに身近な暮らしのなかで成長する社会であってほしいと思っている。

現在、子どもと同じ目線で生きてきたのだろうかと思ひやり、いまになって反省している。仕事仕事の明け暮れのなかではあっても、たまの休みに子どもたちをどこかへ連れて行ってやろうとしたことはある。たとえば「動物園に行こう」と出かける。そこまではいい。

出かけた先で子どもと無心になって遊べただろうか。してやっているという意識が心のなかに残っていた気がするのだ。同じようにぶつかって真正面から子どもたちと向かいあってきたのだろうか。そういうことをしてこなかったことが、子どもにとってのお父さん像とお母さん像の違いにも繋がっている。

男たちは仕事だけに生きてきた。それも大きなことだけれど、他の世界でどれだけしっかりと足を踏ん張って生きてきたのかと問いかけたときに、どうも他のところは手薄になってしまっている。仕事以外のことに貪欲に、あれもこれも関わり得ることが大切だ。

子どもとの関係でふれたけれど、夫婦の関係はどうだったのか。同じ目線で生きてきたと断言できるのか。その上であらためて仕事って何なのかということを問い直してみたいと思っている。

関西から始まったメンズリブ市民活動は、「男らし

さ」を問い直し、「互いの個性尊重」「役割規範からの自由」をめざした取り組みをしてきた。その取り組みのひとつが、男性に向けた「暴力なしで暮らす方法」の提案だった。男女間だけでなく、自分の腕力や社会的地位、経済力をかきこめて、他者をコントロールすることをいさめる活動とも言える。

3) メンズリブの普及

社会を変えていく手立ても必要だ。幸い、男女共同参画基本法が1999年6月に誕生し国レベルで基本計画が新たに策定された。

それを基に都道府県レベルで基本計画をどうするか、新たに条例を作るか、それが都道府県から市町村レベルに広がってきた。

そういったなかで私を含めメンズセンターのスタッフたちは、基本計画や条例を検討する場、審議会や懇話会等に委員として名を連ねている。

委員の多くは女性の立場から発言しているが、男性の立場から見えてくることを発言する。そうすると、基本計画や条例というかたちで地域行政の施策のなかに投影させることができる。自分たちの思いを社会に活かしていく流れがでる。

また男たちの労働環境も問題が大きいので、経営者やオーナー、人事担当や労働組合の人と一緒にミーティングや検討会ができないかと考えている。

子どものこともそうだ。

私たちはメンズセンター編著で『男の子の性の本』（解放出版社）を作った。

これは中学生、高校生の男の子に向けて、性のあり方、セックス問題について、女性と対等な位置関係で向かい合うとはどういうことかを伝えたい、同性愛者についての偏見をなくしたい、それらを含めて作った本である。

このような教材をどう工夫していくか、というのにも必要だ。

教育現場で直接語りかけてほしいし、先生たちとそれについて話し合うことも必要だ。

官公庁だと、管理職や職員の研修で、男女共同参画について語る機会もある。市民レベルでもある。労働組合でも官公庁関係の組合なら、男女共同参画がきっかけ研修課題としてあがってきている。

最近、行政と民間の中間の第三セクターでも少しずつ始まった。



民間企業ではなかなか機会がない。人権学習の一環として、あるいは定年前教育のなかで、男女共同参画を語れる環境を作りたい。

いろいろな場面で男女共同参画を問い直せる場を重ねることが必要だ。

4) 官公庁との共催

メンズセンターでは「一人ひとりと向かい合っとうするか」とともに「社会に向かってどう発信していけるのか」ということが大切と考え、官公庁とタイアップする事業を実施してきた。

共催とか主催といった名義を官公庁から借りることはよくあるが、名義を借りるだけでなく人材も借りる。つまり、対等な企画運営、一緒になってイベントを組み立て、実行委員会に参加していただく。一緒になって知恵を出し合う。分科会の構成をどうするかを一緒に提案する。市民活動団体と官公庁がジョイントすることで、私たち市民活動団体側の思いを官公庁に伝え、私たち市民活動団体は官公庁の立場を理解しつつともに作り上げていく。難題が持ち上がっても、柔軟に相互理解を図りながら課題を解決していく。このように一緒に作ることが必要だ。

これまで、メンズセンターでは、男女共同参画を旗印にして、いろいろな講座を組んできた。昨今、男女共同参画を謳わない講座もしようとしている。

たとえば、2003年1月、2月に大阪市総合生涯センターとの共催事業で、市民人権学習事業を持った。その講座のタイトルは「おとこのちょっと寄り道講座」である。

JR大阪駅のそば、駅前第二ビルの5、6階に生涯学習センターがある。その立地を活かし、勤め帰りの男性に寄ってもらおう。いつもはそのまま飲み屋に行くのをちょっと寄り道してもらい、学習した後に飲み屋に行ってもらえばよいのではないかということをやった。

全5回の講座で、介護問題、死の周辺問題、仕事関連、家庭関連、地域関連の話題をひろったが、男女共同参画という言葉を使わず、「少し立ち止まって自分を振り返ってみませんか」と問いかけた。

そこでは講師の具体的な体験談を通して触発され、その後、それをキッカケに自分語りをしてお互いにいろんな話を共有し自分を見つめる作業をした。

偉い権威を持つ人ではなく私たちの仲間が講師を務

めたので、同じ目線、同じ土俵に居る者同士と一緒に語り合えるのだ。

5) 男性更年期

男性学、メンズリブに関わる男たちが、男の生き方を問い直そうと毎年、開催している「男のフェスティバル」では、繰り返し、「男の更年期」の話し合いを続けてきた。この分科会で話し合ったことを紹介しておこう。

第2回男のフェスティバルでは、フリージャーナリストである宮淑子さんを迎えて、「男の更年期」の話し合いを持った。

「女の更年期」は、マイナスイメージがともなうものの、その時期を避けて通れないものとして認知され、語られてきたが、更年期が男性にもあるのだという認識は、いまだ市民権を得ていない。

私自身も、寝汗をかく、不眠症、イライラ、肩こり、うつなどの症状をかかえながら苦しんできた。それら諸症状をひっくるめて「男性更年期」と把握できることについては、宮淑子さんから指摘を受けるまで、知らなかった。

女性たちにとって「更年期」は、閉経という具体的な体験をともない、「子どもを産めなくなった私は女でなくなったのだ」という縛りを受けて、秘め事であり続けた歴史を持つ。一方、強くたくましく生きること強いられてきた男性は、体力の減退、性欲の衰えをともなう「男性更年期」を、女性と同じような意味合いで受け入れ難くしていると指摘することができる。

「思春期」を子どもから大人への移行期ととらえ、身体の変調とうまくつきあい、乗り越える方法を模索したのと同じように、男性も女性も「更年期」を中年期から老年期に向かう身体の変化ととらえ、うまくつきあう術をみつける必要がある。

宮淑子さんが「病院に婦人科（女性科）があるように、男の身体と心を総合的に診療する男性科があるべきです」と発言したが、示唆に富む言葉だ。

6) 専門医と持った「男性更年期」分科会

第8回男のフェスティバルでは、大阪医誠会病院で「男性更年期外来」を担当する石蔵文信さんと、「男の更年期」分科会を持った。

「男性更年期外来担当の医師・石蔵文信さんを囲んで、男性更年期について語り合しましょう。中高年男



性の過労死、過労自殺。うつ。働き過ぎ症候群。ストレス社会のなかで悶々と生きる中高年。性欲減退。勃起不全。精神も肉体も疲れ、若いころの元気を失っているあなた。身体の声に耳をすましたことがありますか。男性更年期を理解することは、心身の健康と向かい合うことです」と呼びかけた。

私は、2004年夏に、左足鼠蹊部の腫瘍の切除手術を受けた。手術の日から5日後に二泊三日の日程で開催される「女性学・ジェンダー研究・交流フォーラム」（国立女性教育会館）の分科会でシンポジストを務めることになっていた。医者と相談の上で手術日を決めた。日帰り手術だったし、医者の許可を得て、抜糸しないまま、その催しに出向いていった。パートナーからすれば、とんでもない暴挙である。彼女にこっぴどく叱られた。自らの健康状態を顧みず仕事を優先している姿は、彼女からすれば信じがたい決断だった。出向いた先で、青白い顔をして元気がない私をみて、多くの人から「大丈夫ですか」と声がかかった。多くの方に心配をかけてしまった。

男性の多くは、健康よりも仕事を優先しがちだと思う。「もっとゆとりを持とう」と講演などで話すことが多い私も、仕事を優先しがちである。手術直後の出張が、そのいい例だ。「更年期」を語ることで、健康を考え、仕事を優先しがちな自分を振り返りたい、そんな思いをこめている。

男性更年期外来を持つ病院はまだまだ少ない。石蔵さんのところに遠方から来院受診する人がいる。石蔵さんがその男性に「どうされたのですか」と問いかけると、「たいしたことないのですが」という答えが返ってきて戸惑うことが多いそうだ。たいしたことがないのなら遠方から来院受診するはずがない。専門医を前にしても、症状をあるがままに伝えず軽く答えてしまう。これも男性問題のひとつだと考えている。

石蔵さんの治療と更年期についての考えを記しておこう。

男性更年期外来を訪れた患者のなかに「男性ホルモンを投与してほしい」と依頼して早く治そうとする人がいる。「ゆっくり治そう」と話しかける。男性ホルモンを投与して、元の異常な状況に戻さない。薬を処方する場合も少なくしか出さない。

更年期、うつになる人は、生真面目な仕事人間が多い。職場でよく働き土日は家族サービス。責任感が強い。何かあれば、他人のせいにならず、自分のせい

にする人が多い。仕事を頑張る120%の生き方でなく80%の生き方でいいではないか。

ホルモンを投与しなくても、精神が落ち着いてくれば男性ホルモンが上がってくる。

うつになってもセックスをしなければならないと考える人がいる。勃起しなくなれば男性でなくなるという意識を持つ人が多い。セックスレスになっているのは、うつになっているから。うつ、不安を取り除けば、勃起障害は回復する。リラックスしないと勃起をしない。また、ウツの薬が勃起障害をおこす。そのことを妻にも話す。3か月セックスレスを続けてからバイアグラを処方する。心因性の勃起障害にバイアグラが効く。石蔵さんの外来は薬がなくなる状態で終わる。

女性は閉経で急激に女性ホルモンが落ちる。男性は男性ホルモンがゆっくり落ちる。更年期外来にくる患者の6割は男性ホルモン正常。男性ホルモン低下だけでは語れない。

外来に来る患者は上司に言っていない。「軽いうつ、不安」と診断書に書く。3か月休めと診断書に書く。ゆっくり治す。ほかには黙って（公表しないで）治していく。企業への対応に苦慮している。「微笑みうつ」が日本に多い。「しんどいときはしんどい顔をしなさい」と言う。

7) 「嫁さん、世話しよか」

私が就職してしばらくたったころ、職場の上司が「嫁さん、世話しよか。知り合いの娘さんで、かわいい娘いるのだけど」。何かの拍子にそんな話題になった。「世話好きな人やなあ」。好感を持って上司を眺めたことがあるが、いま思えば、男社会の陰謀がそのメッセージに隠されている。

結婚して身を固めれば、仕事シフトにしっかり組み込もう。妻を養わねばならないから、仕事をそろそかにはしないだろう。妻が夫の食事や健康管理につとめらるだろう。

「仕事浸け人間」量産システムの始まりが結婚なのだ。少なくとも30年前はそうだった。

男たちは、幼いころから「身を粉にして働き続けることが男性の甲斐性だ」と刷りこまれてきた。「自分の稼いで家族が生活していけるのだ」と自分の体にムチ打ち、家族とのふれあいタイムを犠牲にしてきた。サービス残業などの時間外労働や休日出勤に何の疑問もはさまない。



新聞を注意して読んでみると、過労死や過労にともなうストレス症候群がよく話題になる。私が元いた職場の男たちは在職死亡、定年直後の死亡と隣り合わせで生きている。過労死だって、決して他人ごとではないのだ。しかし、そんな働き方に疑問を感じながらも、言いだせずにいる。出世街道から離脱したくないし、「仕事より家庭をとった」と言われたくない。仕事を干されることが怖くもある。

私の体験を語れば、妻が病気でサポートをしようと悪戦苦闘していたとき、家庭内事情を職場で話題にしたら、「家庭内のことを職場に持ち込むな」と上司がきびしく糾弾したことがある。家庭内にいろいろ事情をかかえながらも、それを隠して仕事をこなすべきだと。家庭内事情よりも、仕事の優先を考えるのが常識なのだそう。

「子どもの寝顔しか知らない。そんな働き方をしてきたからこそ、会社の業績がアップしたし、いま部長になれた」「胃潰瘍を一度や二度経験してこそ（つまり、それだけの頑張りをを見せてこそ）社会に通用する男性になれる」。そんなことを誇らしく語る男性がいる。自慢話の域にとどまるなら、その人の勝手だが、「だから、お前たちも」という訓示のニュアンスがつきまとう。

若いころ、仕事に埋没してしまうことに危惧を感じて、趣味の世界を大切に生きていてきた私も、いつしか仕事人間に変身してしまっていた時期がある。つきあい残業が日常化してしまった職場に配属され、自分の世界を大切にしたいと願いながらも、「自分の持ち場の仕事は終わったので、お先に失礼します」と話せず悶々としていたことがある。

そんな日々の暮らしのなかで、男たちの身体が冒されていく。

「仕事だけ人間になりたくない」と考え、メンズリブの活動をはじめたわけだが、会社を辞めたいま、メンズリブ市民活動をのぞけば何も残らない人生を演じてしまいそうな不安がある。空いた時間が怖いというのだろうか、メンズリブ関連の活動をどんどん引き受け、スケジュールに余裕を持たせる勇気がない。自分を「働きづめ」にしないとおれない性、これからの脱却が課題だ。

俗に働き盛りといわれる40歳代の男性は、仕事の重責を担う年代でもある。中間管理職を経て企業の中核に至る出世コースの分岐点に立っているとでもいい。

そのせいか体力と性欲の減退を感じ、身体の変調に気づいても、無理を重ねる人が多くみられる。女性に更年期があるように、男性にも更年期がある。

男性に、生活スタイルを変えてほしいと願っている。石蔵さんと共に、「男性更年期」を紹介する機会を多く持つこと、また、症状が軽い人たちの自助グループを持つこと、そもそも、仕事偏重の生活スタイルを見つめなおす語りの場を持つことを、進めていきたい。メンズリブ、男性学で、訴えてきたことと重なると考えるからである。

おわりに

メンズセンター市民活動を中心に男性のエンパワメントにふれた。生涯学習の場で男女共同参画とは何かを学習して、男女がフェアな関係を築き、仕事と私生活をバランスよく生きる術（ワーク・ライフ・バランス）を会得する仕掛けを工夫してきた。本稿でふれなかったものを含め、これまでの取り組みを整理しておこう。

- (1)メンズリブ研究会例会
- (2)茶話会
- (3)男のコミュニケーション教室
- (4)メディアの男性像プロジェクト
- (5)メンズ・スタディーズ研究会
- (6)ネットワーク部会
- (7)珍珍トーク
- (8)男のための非暴力研究会
- (9)男のフェスティバル（官公庁・財団と共催）
- (10)官公庁との共催講座「おとこのちょっと寄り道講座」ほか
- (11)女性団体との共催事業
- (12)大阪市からの委託事業（大阪市「男性相談」）
- (13)出版企画、『メンズ・ネットワーク』の編集・発行など。

これらの事業を実施してきたわけだが、一人ひとりに向合う仕掛けと社会変革を視野におく試み、男女共同参画を色濃く投影させたイベントと男女共同参画という言葉を使わない講座など、いろいろ工夫してきたつもりである。



〈注〉

- 1) メンズリブ研究会を呼びかけたのは、味沢道明（関西育時連）伊藤公雄（大阪大学）大山治彦（アジアの買売春に反対する男たちの会・大阪）中村彰（京都新聞社）水野阿修羅（アジア・フレンド）の5人。所属は発足当初のもの。なお、日本の男性運動を概観した報告に大山治彦、大束貢生「日本男性運動のあゆみ(1)〈メンズリブ〉の誕生」（『日本ジェンダー研究』2号、日本ジェンダー学会、1999年）がある。
- 2) 中村彰「九月例会報告」ほか（『わたしからフェミニズム——日本女性学研究会20周年記念誌』日本女性学研究会、1998年）
- 3) 中村彰「男性学元年」（『関西女性学ニュース』4号、関

西女性学研究会、1998）

〈著書・論文〉

『わたしの男性学』近代文芸社、1994年
 『全力疾走した男たち』近代文芸社、1996年
 『男らしさから自分らしさへ』メンズセンター編 かもがわ出版、1996年
 『ドメスティック・バイオレンスへの視点』日本DV防止・情報センター編、朱鷺書房、1999年など。
 『男の子の性の本』メンズセンター編 解放出版社、2000年
 『ドメスティック・バイオレンスをめぐる男の問題』『日本ジェンダー研究』7号、2004年

資料

日本における男女共同参画分野の男性グループの取り組み（メンズセンターを中心に）

* グループは「現在、休会中」を含む

1977年（昭和52年）

- ・「男の子育て」を考えるシンポジウム（10月 東京）

1978年（昭和53年）

- ・「男の子育てを考える会」発足（4月 東京）

1980年（昭和55年）

- ・「男も女も育児時間を！ 連絡会（育時連）」発足（6月 東京）

1988年（昭和63年）

- ・「男も女も育児時間を！ 関西連絡会（関西育時連）」発足（12月 京都）
- ・「アジアの買売春に反対する男たちの会」発足（12月 東京）

1989年（平成元年）

- ・「アジアの買売春に反対する男たちの会・大阪」発足（6月 大阪）
- ・「日本女性学研究会」が「討論会・男はフェミニストになれるか」（9月 大阪・豊中働く婦人の家）開催

1990年（平成2年）

- ・「男の男による男のためのシンポジウム 『男らしさ』にとらわれない生き方あそび方」（9月 大阪・大阪市立北区民センター）を「男も女も育児時間を！ 関西連絡会（関西育時連）」を中心に開催
- ・シンポジウム「男も取りたい育児休業」（12月 大阪・大阪市立婦人会館）を「男も女も育児時間を！ 関西連絡会（関西育時連）」「日本女性学研究会」ほかが開催「報告書」も刊行されている

1991年（平成3年）

- ・「メンズリブ研究会」発足（4月 大阪）
- ・「男も女も育児時間を！ 関西連絡会（関西育時連）」が「第1回日本父親大会」（9月 大阪・大阪市立婦人会館）を開催。

1994年（平成6年）

- ・「メンズリブ・フォーラム岡山」発足（2月 岡山）

1995年（平成7年）

- ・「メンズリブ東京」発足（4月 東京）
- ・大阪府立女性総合センター（以下ドーンセンター）特別相談「男の悩みホットライン——男性のための電話相談」（9—10月 大阪・ドーンセンター）にメンズリブにかかわる男たちが相談員をつとめる
- ・「メンズセンター」開設（10月 大阪）メンズリブ研究会を改組して誕生
- ・メンズセンター開設記念講演会（10月 大阪・ドーンセンター）



- ・『『男』悩みのホットライン』（相談電話 06-6945-0252）開設（11月 大阪）第1第2第3月曜、19時—21時
- ・シンポジウム「男らしさのそん（損）？」（11月 大阪・ドーンセンター 主催・メンズセンター）
（このころから日本各地で男性グループが誕生するようになった）

1996年（平成8年）

- ・メンズセンター編『『男らしさ』から『自分らしさ』へ』（かもがわ出版）出版（6月）
- ・「人生相談・男もつらいね」（8月—12月、「朝日新聞（大阪本社版）」夕刊）の回答者をメンズセンター・スタッフが担当
- ・第1回「男のフェスティバル」開催（11月 京都・京都教育文化センター）

1997年（平成9年）

- ・中村彰・中村正編『男がみえてくる自分探しの100冊』（かもがわ出版）出版（2月）メンズセンター「メンズ・スタディーズ研究会」メンバーによる著作である
- ・「第31回日本民族学会研究大会」（5月 大阪・国立民族学博物館）でグループ発表「男の性と生を考える——研究と実践の現場から——」を持ち、メンズセンター、メンズリブ東京ほかのメンバーが報告
- ・メンズセンター編『男たちの「私」さがし』（かもがわ出版）出版（6月）
- ・第2回「男のフェスティバル」開催（9月 大阪・ドーンセンター）
特別分科会「メディアがとらえた男性問題」「こうすればいかがですか、男性問題啓発プログラム」

1998年（平成10年）

- ・第3回「男のフェスティバル」開催（9月 東京・足立区女性総合センター）
- ・「メンズリブ神奈川」発足（4月 神奈川）
- ・「メンズリブ福岡」発足（10月 福岡）
- ・「ドーン・フェスティバル」（11月 大阪・ドーンセンター）の分科会「男の非暴力ワークショップ」をメンズセンター「男の非暴力研究会」が担当
- ・「第71回日本社会学会大会」（11月 兵庫・関西学院大学）で、「性・ジェンダー2」分科会を持ち、メンズセンター「メンズ・スタディーズ研究会」メンバーが報告

1999年（平成11年）

- ・「DV防止プロジェクト」発足（2月 東京）「男の非暴力ワークショップ」を実施
- ・メンズセンター「男の非暴力研究会」が大阪府男女協働社会づくり財団と共催で「男の非暴力ワークショップ（全6回）」を開催（5—6月 大阪・ドーンセンター）
- ・第4回「男のフェスティバル」開催（9月 京都・京都府女性総合センター）
このなかで「シンポジウム・メンズリブの10年」を実施
- ・メンズセンターは大阪市から男女共同参画社会の実現に貢献した団体と認められ「1999年度きらめき賞」の贈呈を受けた（10月 大阪）

2000年（平成12年）

- ・ドーンセンター特別相談「男の悩みホットライン なぜ、女性に暴力をふるってしまうのか？」（2月 大阪・ドーンセンター）にメンズセンターおよび「男」の悩みのホットラインのスタッフが相談員をつとめる
- ・メンズ・サポート・ルーム発足（5月 京都）メンズセンター「男の非暴力研究会」を改組して独立、「男のための非暴力ワークショップ」を引き継ぐ
- ・『男性雑誌とジェンダー』（メンズセンター）を刊行（6月）メンズセンター「メディアの男性像プロジェクト」による男性雑誌分析の報告書である
- ・「女性学・ジェンダー研究フォーラム」（8月 埼玉・国立女性教育会館）の分科会で「男性雑誌とジェンダー」をメンズセンターが担当
- ・メンズセンター編『男の子の性の本』（解放出版社）出版（9月）



- ・第5回「男のフェスティバル」開催（9月 兵庫・宝塚市立女性センター）
- ・第17回「日本女性会議2000 津」（11月 三重）の「第7分科会：男性 男が語る男女平等：本音で話そ」にメンズセンター・スタッフがシンポジストとして参加
- ・「ドーン・フェスティバル」（11月 大阪・ドーンセンター）の分科会「男性雑誌とジェンダー」をメンズセンター「メディアの男性像プロジェクト」が担当

2001年（平成13年）

- ・「女性学・ジェンダー研究フォーラム」（8月 埼玉・国立女性教育会館）で分科会「21世紀のメンズリブへ」をメンズセンターが担当
- ・シンポジウム「身体から性を再考する」の開催にあたりメンズセンターが実行委員会に参画（8月 大阪・ドーンセンター）
- ・第6回「男のフェスティバル」開催（9月 福岡・福岡市立女性センター）
公開シンポジウム「あたらしい男」にメンズセンターおよびメンズリブ福岡のスタッフがシンポジストをとめる
- ・「第5回日本ジェンダー学会大会」（9月 京都・華頂短期大学）が大会テーマ「男性というジェンダー」で開催され、メンズセンター・スタッフほか報告
- ・「世界女性文化会議・京都2001」（9月 京都・国立京都国際会館）における分科会「男性の意識改革」でメンズセンター・メンバーがシンポジストとなる
- ・「メンズサポートふくおか」発足（11月 福岡）「男の非暴力ワークショップ」を実施

2002年（平成14年）

- ・第7回「男のフェスティバル」開催（9月 大阪・クレオ大阪中央）

2003年（平成15年）

- ・「おとこのちょっと寄り道講座」（1—2月 大阪・大阪市立総合生涯学習センター）
- ・なにわネット企画「ええもんみつけよ！ 豊かな高齢社会へエンパワメント」（「高齢社会をよくなる女性の会・大阪」とジョイント事業）。メンズセンターの担当は参加型講座B「“おとな” その多様な生き方を検証・自分らしく生きるために」（2—3月 大阪・ドーンセンター）
- ・「女性学・ジェンダー研究フォーラム」（8月 埼玉・国立女性教育会館）で分科会「おとこのちょっと寄り道講座報告」をメンズセンターが担当
- ・第8回「男のフェスティバル」開催（9月 愛知・つながれと名古屋）
- ・第20回「日本女性会議2003 おおつ」（10月 滋賀）の「第8分科会：男性・女性 男らしくよりも自分らしく」にメンズセンター・スタッフがシンポジストとして参加
- ・講演会「マイケル・カウフマンさんを囲んで〜ホワイトリボン・キャンペーンに学ぶ〜」（11月 東京・国立オリンピック記念青少年総合センター）をきっかけに、「暴力を選ばない男になろう」と呼びかける運動始まる（「ホワイト・リボン・キャンペーン日本」東京）

2004年（平成16年）

- ・大阪市「男性相談」（メンズセンターが大阪市から委託を受ける）
- ・「女性学・ジェンダー研究・交流フォーラム」（8月 埼玉・国立女性教育会館）で、「企画委員ワーク男女共同参画でひろげる男の生き方」にメンズセンター・スタッフが参加
- ・「女性学・ジェンダー研究・交流フォーラム」（8月 埼玉・国立女性教育会館）で分科会「メンズセンター10周年に向けて〜進捗と課題」をメンズセンターが担当
- ・「メンズ・リブ・フォーラム札幌」発足（9月 北海道）
- ・第9回「男のフェスティバル」開催（9月 香川・高松市生涯学習センター）
基調講演「男女共同参画でひろげる男性の生き方」
シンポジウム「日本の男性運動の成果と課題」ほか



- ・北京 JAC 全国シンポジウム（10 月 大阪・ドーンセンター）で分科会「日本における男性運動の 10 年～進捗と課題」をメンズセンターが担当
- ・シンポジウム「メンズセンター10 周年に向けて～進捗と課題 男たちの私さがし」を開催（11 月 京都・京都市女性総合センター）

2005 年（平成 17 年）

- ・シリーズ講演会「女も男も輝いて生きる」（第 1 回「男の現状 本音でボロリ」）メンズセンター・スタッフが報告（1 月 愛知・名古屋市女性会館）
- ・第 5 回ローズWAMまつり（2 月 大阪・ローズWAM）で分科会「日本における男性運動の 10 年～進捗と課題 男たちの私さがし」をメンズセンターが担当
- ・第 10 回「男のフェスティバル」開催（9 月 大阪・ドーンセンター）開催

メンズセンターが定期的に開催してきた分科会・プロジェクト（終了したものを含む）

メンズリブ研究会例会、茶話会、男のコミュニケーション教室、「職場のイジメ」分科会、メディアの男性像プロジェクト、ネットワーク部会、珍々トーク、メンズ・スターディーズ研究会、男の非暴力研究会など

メンズセンターが大阪市から委託を受けている事業

大阪市「男性相談」（クレオ大阪北）

相談日時 毎週金曜 19：00～21：00

電話相談 06-6815-7405

面接予約専用 06-6815-7420

（なかむら・あきら メンズセンター運営委員長）